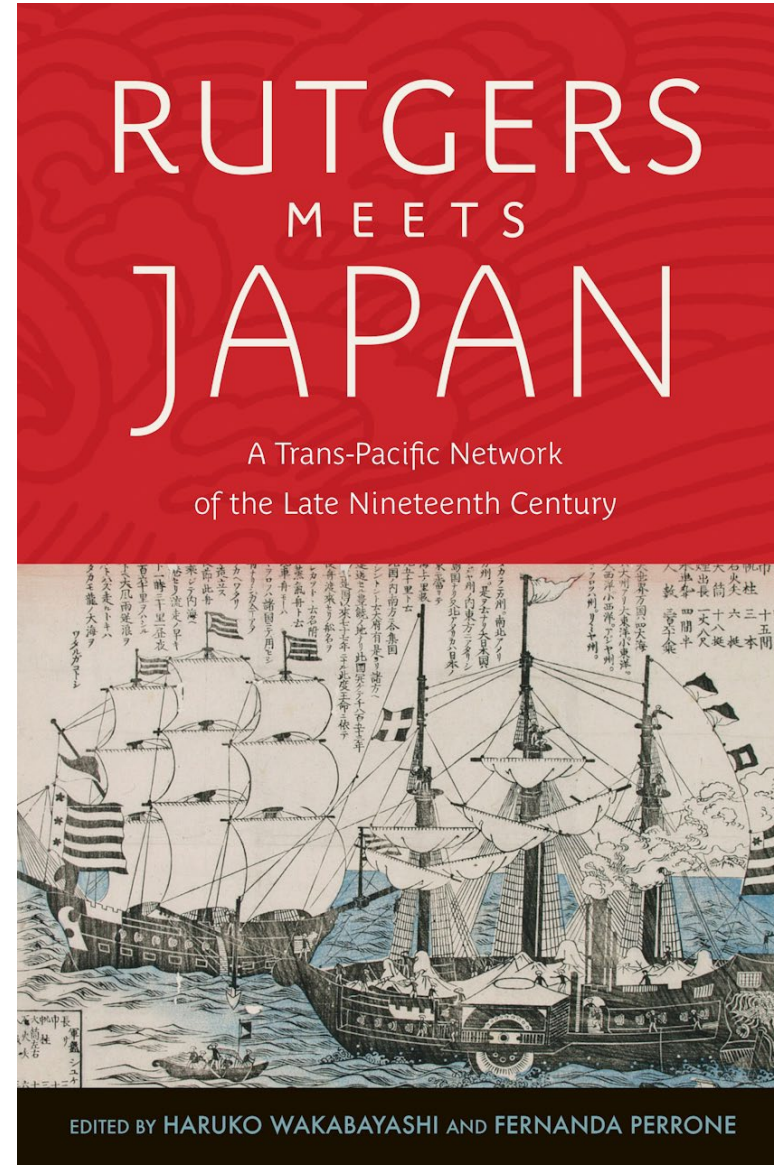


令和7年度 教員 短期 留学報告

- 【所属、職名】 外国語学部教授
- 【氏名】 塩崎 智
- 【留学先】 アメリカ合衆国ニュージャージー州立
ラトガース大学
- 【目的】 幕末維新时期日本人留学生関連史料
調査、及び在米研究者との情報交換
- 【期間】 令和7年8月5日
～令和7年8月26日

2026年1月
出版予定の
*Rutgers
Meets Japan*



第Ⅰ訪問地 ラトガース大学アレグザンダー図書館 (Alexander Library)

ラトガース大学(Rutgers College 1766年設立)

オランダ改革派教会とつながりの深い私立大学として設立。

江戸時代末期に、米国から日本に派遣されたオランダ改革派教会の宣教師の紹介で、1866年代後半から日本人留学生が同大学で学び始める。

ラトガース大学の卒業生で、日本人留学生と親しかったグリフィス (William Elliot Griffis) が、1870年に日本にお雇い外国人教師と呼ばれ、福井県、後に東京の学校で日本人を学生に化学、英語等を指導。

その後も、ラトガース大学の卒業生が、日本に教師として派遣された。

日本とラトガース大学の歴史的繋がりについて、関連する研究者の英語論文を集めた学術書 *Rutgers Meets Japan* が、2026年1月に出版され、自分も1章を担当している。

アレグザンダー図書館 (Alexander Library) 所蔵 グリフィス・コレクション (Griffis Collection)

グリフィス宛の書簡、所有物等が集められていて、その中には日本人留学生からグリフィス宛の英文書簡が多数あり、米国日本人留学生研究者にとっては貴重な史料となっている。

今回も熊本藩留学生の横井兄弟が書いた書簡を熟読した結果、貴重な情報が得られた。

また、自分が研究中のサンフランシスコ留学関係者の一人、City College (サンフランシスコ) の校長ヴィーダー (Peter Vrooman Veeder) からグリフィスへの書簡も2通発見し、同図書館司書のフェルナンダ・ペロン (Fernanda Peron) 氏の協力を得て、解読することができた。

ペロン氏は2018年の在外研究時大変御世話になった。

第2訪問地 ボストン 公共図書館 (Boston Public Library)

今回の留学の拠点は、ラトガース大学のある、ニュージャージー州ニュー・ブランズウィックとした。

ニュー・ブランズウィックからニューヨークまでは中距離鉄道で1時間の距離で、ニューヨークからボストンまではバスで5時間かかる。

ボストンは、ラトガース大学と並ぶ、日本人留学生の「メッカ」的な都市で、1860年代から70年代にかけて多くの日本人が留学していた。

ボストンの中心にある公共図書館は、19世紀のボストンの新聞、住所録等の資料がデータベースに保存されていて、日本人留学生やその関係者の様々な資料が無料で入手可能である。

第3訪問地 ボストン郊外ケンブリッジ マサチューセッツ工科大学 (MIT)

マサチューセッツ工科大学は1861年に、ボストン市内に設立された、米国を代表する工科大学である。1870年代には、ここでも日本人留学生が学んでおり、団琢磨は同大学の最も有名な卒業生である。

同大学は、日本人の永原宣准教授が勤務しており、歴史の講義を担当している。永原准教授は、同大学の古文書館を案内してくれ、彼が研究中の日本人留学生の手紙を見ながら説明をしてくれた。また、自分が研究上必要と考える資料の撮影の手筈も整えてくれた。

永原准教授とは、ボストン留学生に関して、その後も情報の交換を続けている。

第4訪問地 ニューハンプシャー州ハノーヴァー ダートマス大学 (Dartmouth College)

ボストンから北にバスで1時間程進んだところにダートマス大学がある。今回のダートマス大学の訪問に関してはニューハンプシャー日米協会会員のスティーブン・アププトン氏 (Steven Upton) が事前に、入念な準備を整えてくれていた。

アププトン氏は、本人も含めて代々ダートマス卒業生で、ダートマス大学の歴史に大変詳しく、同大学の歴史学准教授であるスティーブン・エリクソン (Steven Erickson) 氏と日本文学准教授ジェームズ・ドーシ (James Dorsey) 氏を紹介してくれた。

ダートマス大学では、盛岡藩南部家御曹司の南部英麿が天文学の研究で2年間留学しており、彼に関する資料を見せてくれ、当時使われていた天文台（現存）にも案内してくれた。

この3人とは帰国後も連絡を取り合い、ダートマス大学に関する情報を提供してもらっている。

南部が
在学時代から
使われていた
校舎



ダートマス大学
に現存する
南部が使ったと
思われる
天体望遠鏡



ダートマス
大学に保存
されていた、
南部英磨の
留学中の写真



南部在学時の
キャンパスと
天文台



第5訪問地 ボストン市 ロックスベリー歴史協会 (Roxbury Historical Society)

ダートマス大学からバスでボストンに戻り、1870年代に日本人留学生が住んでいたロックスベリー地区を訪問した。

事前に現地の歴史協会（Historical Society）に連絡を取ったところ、ハーバード大学の、日本歴史学者であるデヴィッド・ハウエル（David Howell）教授にも会うことができ、ロックスベリーに関する有意義な情報交換を行うことができた。

ロックスベリー 歴史協会の、 日本人留学生と 恩師との写真の 掲示

Charles K. Dillaway *Family and Scholarship*



Charles K. Dillaway with his Japanese students, from the left: Hanabusa Yoshimoto, Tsuge Zeng, Hiraga Isosaburo, and Aoki Yoshihira. All were of the samurai class, who made up the majority of exchange students due to their high levels of education. Mr. Hanabusa Yoshimoto became a diplomat, government official, and president of the Japanese Red Cross.

This house hummed with teaching and music for most of the 1800s. Martha Dillaway—niece of the last pastor to live in the parsonage—inherited the house in the 1830s and lived here until her death in 1903.

Martha's husband, Charles, was a writer and scholar. He taught at the prestigious Boston Latin School and served as its headmaster from 1831-36. He wrote textbooks, served on the board of the Roxbury Latin School, and helped found the Boston Society of Natural History.

The Dillaways' busy household included three

第6訪問地 ニュー・ブランズウィック神学校 セージ図書館 (Sage Library)

ニュー・ブランズウィック神学校はラトガース大学キャンパス内にある神学校で、そのセージ図書館に、日本に派遣されたオランダ改革派教会の宣教師から米国に送られてきた書簡等が納められている。

日本でのリサーチで、ここに彦根藩留学生鈴木貫一が日本語で、おそらく宣教師バラに書いた手紙が2通保存されていることが分かったので、事前に司書に連絡を取り、その書簡の実物を見せてもらうことができた。

保存状態は良好で、内容も無事確認することができた。

第7訪問地 ニュージャージー州 プリンストン大学 (Princeton University)

再びニュー・ブランズウィックに戻り、同大学の日本史研究者である若林晴子准教授とともに、プリンストン大学の古文書館を訪問した。若林准教授も図書館司書のフェルナンダ・ペロン氏と同様に、同大学から出版される *Rutgers Meets Japan* の共著者の一人である。

プリンストン大学は、ダートマス大学で学んでいた南部英磨が転校して1年間学び卒業した大学である。南部のプリンストン在学に関しては、日本では史料が入手できなかったが、ここで卒業生関連書物等から、南部の在学と卒業を確認することができた。

プリンストン 大学キャンパス



総括

今回の短期留学の成果は以下の通りである。

1. ニュージャージー州のラトガース大学を本拠地に、電車で1時間のニューヨーク市、そこからバスで5時間のボストン、バスで40分のプリンストン等、これまでなかなか足を運べなかった地域でリサーチを進めることができた。今、自分が論文等執筆中のサンフランシスコの日本人留学生、南部英磨研究、かつてのメインテーマだったボストンの日本人留学生等、多くの領域で史料を発掘する研究を進めることができた。

2. もともと面識があった、ラトガース大学の若林准教授、ペロン司書の人脈から、ボストンやダートマス大学の日本歴史研究者との交流を持ち、研究に関する貴重な情報を交換することができ、今後の研究の進展に役立てることができるとは間違いない。

このような大変貴重な機会を与えていただき、拓殖大学には深く感謝している。今後は研究の面でも大学に貢献したいと考えている。